

2019年
12月16日号 No.1549



週刊

教育資料

EDUCATIONAL PUBLIC OPINION <http://www.kyoiku-shiryō.co.jp>



潮流

「SDGs探究アワード」を企画

一般社団法人未来教育推進機構・若手人材部会 研 良平

資料

OECD 生徒の学習到達度調査2018年調査(PISA2018)のポイント

—文部科学省・国立教育政策研究所

CONTENTS

▶ 2 潮流

「SDGs探究アワード」を企画

研 良平(一般社団法人未来教育推進機構・若手人材部会)

▶ 5 解説・ニュースの焦点

○キャリア教育で優良校等126団体を表彰

編集部

○PISA2018、読解力が有意に低下

編集部

▶ 8 経営改善につながるプログラミング教育

「条件分岐」で論理的な考え方を身に付けよう

森田泰司(茨城県古河市立総和南中学校校長)

▶ 10 特別企画

インターネット安全教室の指導者向け教材とは?

▶ 12 校長講話

校長室だよりを活用した学校経営・その⑧

井口寛隆(東京都武蔵村山市立第三中学校校長)

▶ 14 合理的配慮—現場の対応事例

教育支援ファイルに関するQ&A—青森県①

編集部

▶ 16 特別資料

「これからの学びを支えるICTや先端技術の効果的な活用について」(論点)

▶ 19 資料

OECD 生徒の学習到達度調査2018年調査(PISA2018)

のポイント

文部科学省・国立教育政策研究所

▶ 32 月間教育ファイル

▶ 35 教育の危機管理

「18歳・成人時代」の主権者教育

佐藤正志(白梅学園大学元教授)

▶ 38 向山行雄のドキュメント『学校経営』

インフルエンザと教師の力量

向山行雄(敬愛大学国際学部教授・教職センター長、全国連合小学校長会顧問)

▶ 40 玉置崇の新学習指導要領 現場での生かし方

「深い学び」を実現するために(その2)

子どもの姿で「見方・考え方」をとらえる

玉置 崇(岐阜聖徳学園大学教育学部教授)

▶ 42 変わる教育委員会

三者共益を目指す教育改革②

栗林芳樹(静岡県・吉田町教育委員会教育長)

▶ 43 教育問題法律相談

児童虐待への対策を強化するための法改正

三坂彰彦(弁護士)

▶ 44 通信・議会質疑

健康・体育⑤

▶ 46 変わる! 英語教育

東京都英語村「TGG」でのプログラム例④

編集部

▶ 48 BOOK

『三度目の日本』

『身近にあふれる「危険な生物」が3時間でわかる本』

▶ 49 自著を語る

『学校のルーティンを変えてみる』

齋藤 浩(公立小学校教員)

▶ 50 元中学校長 浅田局長の文科省日誌

外国人の子供たちの日本語教室、母語教室へ

『教育格差』著者を招きEBPMの勉強会

浅田和伸(文部科学省総合教育政策局長)

▶ 52 マイオピニオン

語りの世界の至宝が私に遺した言葉

平野啓子(語り部・かたりすと)



一般社団法人未来教育推進機構
若手人材部会
ときりようへい
研良平さんに聞く

潮流

「SDGs探究 アワード」を企画

世界の問題を自分ごととしてとらえ
中・高校生や大学生が探究活動を
発表し合う場を作った。

「SDGs」達成に若い力を生かす場になる。

若者の成長を支援

一般社団法人未来教育推進機構（UMEDAI）は、「出会い×学び＝成長」をキーワードに、未来を生きる若者の成長を支援することを目的に平成29年に設立された団体。事務局には大学生も参加し、さまざまなプロジェクトを社会人と一緒に進めてきた。年齢や性別、立場を超えた出会いの中で培い学んだことを表現でき、アクションにつなげる場をプロデュースしている。

現在は、「学生・若手活性推進」「女性活躍推進」「海外人材活用促進」「学習メソッド開発」の四つの対象別のプロジェクトを、対応する四つの部会が中心になって進めている。

研 そのももは大阪の梅田地域全体を「学びのキャンパス」にしようということからスタートしました。大学などの学内での学びは重要ですが、一方で、学外でのさまざまな人との出会いを通じた学びも必要ではないか、と考えています。講義中心の学びからフィールドワークやPBL（問題解決型学習）など、新しいスタイルの学びも広がっています。学校ではできないこと、学校の外の方がやりやすいこともあります。私たちは「まち」というフィールドを使って、さまざまな

学びを広げていきたいという思いから活動を始めました。

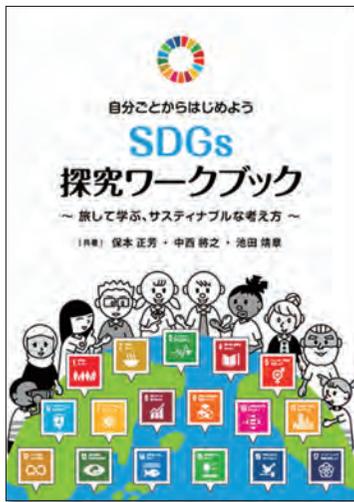
四つのプロジェクトのうち、学生・若手活性推進プロジェクトでは、「大学サテライトキャンパスの有効利用」「学生に単なる学力・知識では解決できない課題に向き合う力の育成」「就職活動の定型化と離職率の高さ」「若手人材の活用」などを課題と捉えて、主として18歳から28歳を対象に、梅田地域をサテライトキャンパス機能が果たせる場にしたたり、学生と社会人でさまざまな学びのプログラムを企画・実践したりしている。就職特訓プログラムや、フィードバック型のインターンシップのほか、若手の社員にとっては社外でのサークル活動のファシリテーターや企業PR、PBLの指導など、社内ではなかなか経験できない成長の機会となっている。

研「SDGs」については、今回、「SDGs探究AWARDS2019」という形で実施することになりましたが、それまでは、私たちと大学生とで一緒にやってSDGsについて「出張ゼミ」という形で内容づくりに取り組んできました。最初は、まず「SDGsとは何か」ということから、行政関係者を招いて勉強会をすることから始めました。

また、学習メソッド開発の分野に関連して、3人の専門家の先生の共著として今年6月に発刊された「SDGs探究ワークショップ」(noa出版、写真)の制作に協力しました。

SDGs探究でアワード創設

「SDGs」とは「持続可能な開発目標」のことで、2015年の「国連持続可能な開発サミット」で合意された。2030年までに達成すべき17の目標と169のターゲットを掲げたものだ。教育関連では「初等教育の完全普及の達成」などが掲げられている。一方、日本国内では「SDGs」の認知度はまだ低く、朝日新聞社の調査では今年8月時点で27%にとどまっている。そこで、未来教育推進機構では、これからの未



来を担う若者たちが世界の問題を「自分ごと」として捉え、持続可能な社会に向けて自分たちができるアクションを考え出し、表現できる場を作りたいという思いから、「SDGs探究AWARDS」を立ち上げた。

研 私たちは、「出会い」や「発見」を通して、異質なものから学ぶことが大切ではと考えています。このアワードでは、エントリーシートは用意していますが、エントリー作品については、探究したことをどのような形式や手段で表現するかを自由としています。文字だけでもよいし、パワーポイントのファイル、音声や動画など、自分が表現しやすい方法で構いません。まず、アクションを一步踏み出しやすいようにしたいと考えています。「SDGs」や「探究」については、学校の先生方も手探りの状態とお聞きしておりますので、生徒や学生たちが探究した結果を表現したものについては、今後の「探究」などの授業で先生方の参考になるように、還元していくことにしています。それがまた、生徒も含めて、次の活動のモチベーションになればと期待しています。「SDGs探究AWARDS」は、世界の国々で抱える問題の解決に向け、自分たちができるアクションを表現してもらおうの

がねらい。全国の中・高校生、大学生などを対象に個人やグループでエントリーできる。審査は書類審査のみで、プレゼン資料やムービーなど、応募者が表現したい形式でエントリーできる。なお、公式サイトでは、教育現場での活用を念頭に、短期カリキュラムや探究活動の進め方に関する情報なども公開していく予定という。12月1日からエントリーを開始しているが、来年の2月5日まで受け付ける。今回は、「SDGs探究ワークブック」の著者の3氏（研究者、企業経営者、学校関係者）が審査を担当する。

研 審査の結果発表は来年2月26日で、「中・高校生部門」と「学生部門」に分けて、それぞれ最優秀賞1点と優秀賞3点を選定し、3月14日に、大阪市内で表彰式やプレゼンテーションの場を設けるほか、公式サイトなどでも可能な限り、掲載していく予定です。

自分が興味を持ったことから

今回の「SDGs探究AWARDS2019」では、中・高校生も対象にしていることもあって、探究の内容は、身近にある解決を迫られている問題を自由に取り上げてもらってもよい、としている。そのテーマで探究を進めていく過程で、世界とつな

がる問題に気づいたりすることもあるし、初めから世界に目を向けて問題を見つけている生徒には、自分たちの生活とそれがどう関わってくるのかを探究してもらい、気づきを深めてもらいたい、という。

研 先ほど、ワークブックの紹介をしましたが、副題を「旅して学ぶ、サステイナブルな考え方」としていますように、世界の国々を旅していくかたちで、興味を持った事柄について探究していくというスタイルの内容になっています。まずは旅をする「わくわく感」から入っていて、観光地などの写真も載せて、その国の産業や文化の特徴なども踏まえて、その背後にどのような課題や問題があるのかを発見していくような筋立てとなっています。自分の創造やイメージと違った現実にはぶつかったりすると、「なぜ？」と思うでしょうし、その理由を調べたいと思う生徒も出てきます。

今回のアワードについては、今後も継続的に実施していくためのモデルケースとして、できれば2030年の国連のSDGsのターゲットイヤーまで、改良しながら実施していきたいという。また、学校現場などでも、このアワードを一つのきっかけにして、年間を通して探究の学びを深めてい

くサイクルづくりに生かしてもらいうことも期待している。

なお、今回はこの企画に対して、公益社団法人2025年日本国際博覧会協会、関西SDGsプラットフォームなどの団体のほかに、近畿経済産業局、大阪府、大阪府教育委員会、大阪市教育委員会など国や地方の行政部局なども後援しているという。

研 私たちの活動では梅田地域の、JR大阪駅・阪急大阪梅田駅近くの繁華街にあるビルが一つの拠点になっており、大學生の運営事務局を置き、各種の勉強会・セミナーなどを実施しています。近く、2025年大阪・関西万博開催の未来に必要なアイデアを学生たちが議論するワークショップや、教育現場でご活躍中の先生方による「探究」の実践例などをお話いただくワークショップなどの開催を予定していますが、今後も教育現場の先生方や様々な団体と連携をしながら、よりよい未来を築くために活動をしていければと考えています。ぜひ今回のアワードも、未来を担う若者が、社会の問題に目を向け、行動を起こすきっかけになればと願っています。

一般社団法人未来教育推進機構 || <http://umeda.jp/>